

医学系学府長 挨拶

平成 30 年度 医学系学府入学式

日 時：平成 30 年 4 月 6 日（金）13:00～

場 所：医学部百年講堂（大ホール）

皆さん、大学院入学おめでとうございます。九州大学大学院医学系学府を代表して、心からお祝いを申し上げます。

大学院は、世界に通じる独創的な研究を行う場です。研究の世界では、例え未熟でも大学院生は一人前扱いされます。修士課程、博士課程を問いません。例えば、大学院生の研究成果は原著論文として英文雑誌に発表することになりますが、大学院生だからといって採点を甘くして論文掲載を許可してくれるような科学雑誌はありません。

逆に、大学院生でも優れた研究をすれば、それは世界的に高く評価されます。2014 年ノーベル物理学賞に輝いた赤崎先生と天野先生の受賞対象研究が、当時大学院生だった天野君と定年間近だった赤崎教授のコンビによるものだったことは記憶に新しいところです。そうです、天野先生は大学院生の時に行った研究でノーベル賞を受賞したのです。皆さんには、目標を高く掲げて、志を育てほしいと思います。特に、より根本的な問題、既存の常識にチャレンジするような問題に果敢に挑んでほしいということです。

2012 年にノーベル医学生理学賞を受賞した京都大学の山中伸弥先生の偉大さは、世間やマスコミで喧伝されているような「iPS 細胞を生み出しそれを実際の再生医療に生かそうとしていること」のみにあるものではありません。これ自体

もちろん大変素晴らしいことですが、山中先生の真の偉大さは少し別のところにあります。実は、山中先生は、「細胞の分化は一方向で後戻りはできない」という医学・生命科学における常識を覆してしまったのです。「細胞の分化は一方向で後戻りはできない」というのは、ついこの間まで医学・生命科学における常識中の常識、言わば基本原理でした。私も学生時代に「変わることはない原理」としてそのように習いましたし、その後も疑うことなくそう信じていました。ここで大切なことは、山中先生が「この常識中の常識」に果敢に異議を申し立てたこと、まさにチャレンジしたということです。

一昨年 2016 年には、福岡市出身の大隅良典先生がノーベル医学生理学賞を、しかも単独で受賞されました。皆さんもよく御存知のオートファジーの研究です。単独受賞ということからも解るように、ブッチギリのお仕事です。酵母の液胞の研究からオートファジーにたどりつき、それを面白いと感じてこつこつと、そして緻密に続けられた研究です。大隅先生は、「そもそも研究というもの、最初から何かはっきりした目的があって始めるものではない。私自身も、医学領域に必ず役立てようなどと考えて始めたわけではない。」と言われてます。また、「サイエンスが世の中にどう役立つか」という観点が、最近あまりにも重視されていることに対して、強い危惧を表明しておられます。重要な研究も、まずは「なんとなく面白い」から始まり、やりながら「ますます面白くなる」ということが、大切なのだと思います。役に立つかどうかは、もしあったとしても、その後の話なのだと思います。一方で、それをやっていて「面白くてたまらない」と感じられるようでない、どんな仕事でも素晴らしいものにはなりません。

皆さんも、是非、直ぐに役に立つかどうか解らないけれど、自分で面白いと思える問題に、あるいは、常識を疑いながらより根本的な問題に、果敢にチャレンジしてほしいと思います。そのような姿勢があれば、たとえ大隅先生や山中先生のような大発見とまではいかななくても、世界中の先達によって培われてきた医学・生命科学の膨大な遺産に、小さくとも確かなものを、皆さんの手で追加できるようになるでしょう。医学・生命科学の発展・進歩の多くは、実は、このような小さな追加の積み重ね、いわば先輩から後輩への地道なリレーによって成し遂げられてきたものなのです。

皆さんには、この「地道ではあるが実りの多いリレー」に積極的に参加し、先輩から引き継いだ医学の道に、小さくてもいいから新たな一步を切り開く、そのような医学研究者になって欲しい、と切に希望します。

2018年4月6日 九州大学大学院医学系学府長 住本 英樹